

# アルゼンチン最大の農協組織ACAの動向

主席研究員 藤野信之

## 1 はじめに

中国が南米に急速に接近している。大豆自給をあきらめた中国は、もともと南米大豆の最大輸入国だが、近年トウモロコシや飼料用小麦も輸入ポジションに転化しつつある。こうしたなかで、中国はこれまで以上に南米諸国との関係強化に舵を切ってきた。具体的には、輸入額の倍増、農業協力深化と緊急食糧備蓄で、農業研究やインフラ部門への支援も含まれている。

また、穀類価格は、①過去数十年に及ぶ低位安定から一段高いところへシフトアップし、②価格の決定要因に南米が組み込まれた点で、以前とは様相が異なるものとなってきた。その要因のベースには、中国等の新興国が穀類の純輸入国になりつつあることがある。

本稿では、ブラジルと並ぶ中国向け大豆輸出大国であるアルゼンチンで、生産者を組織化し穀物メジャーと対抗する、アルゼンチン最大の農協組織ACA(Asociacion de Argentinas)の概要を見ることとしたい。

## 2 アルゼンチンの穀類需給

アルゼンチンではパンパと呼ばれる中央部の肥沃な平原での穀類生産が盛んで、ことに大豆は収穫面積と単収増による生産増を生じている。もちろんその前提となる需要要因として、耕地不足で大豆、大豆油の国内自給をあきらめた中国による輸入需要の急拡大がある。

一方、トウモロコシ、小麦は、内需を優先し国内価格を下げることを目的とした輸出規制(輸出割当制)があったこと等から、収穫面積は横ばい傾向にある。

大豆の生産量は、パンパに属するコルドバ、サンタフェ、ブエノスアイレスの3州で8割程度を占め、トウモロコシでも7割強と、そのほとんどがパンパ地域で占められる。

いずれにしろ、パンパの中心ロサリオを中心にした半径300kmの中に全国の半分の大豆畑がある。

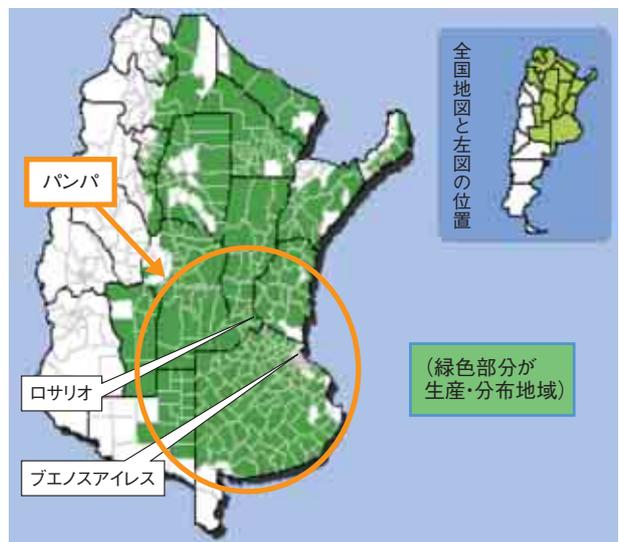
## 3 ACAの概要

ACAは、全農が1964年来の穀物輸入協定関係もち、近年トウモロコシの調達先多元化のために提携を強化したアルゼンチン最大の農協連合会である。10州にまたがるパンパを中心とする穀類の生産地域600町に、会員組織である153組合(単協)があり、結成指導中の組合も49ある(2011年)。

153組合を構成する組合員は中小・家族経営農家5万人で、1組合当たりの組合員数は327人と少ない。職員数は7千人で、1組合当たりの職員数も46人と少ない。ACA本会の職員数は2,276人で、1組合当たり15人の職員がいることとなる。

歴史的には、200年前に初めの1組合ができ、その数が8~9になった1925年にACAが組成された。

第1図 大豆生産地域とACA単協の分布地域



資料 MinAgri(アルゼンチン農牧漁業省) ホームページに補記  
(注) トウモロコシ、小麦もほぼ同様の地域分布となる。

穀類の販売数量は11年で12百万トンと、アルゼンチン全体の12.5%を占め、10年間で倍増した。販売数量の増加は、当然ながら中国の大豆輸入増と軌を一にしている。

事業内容の第一は、①組合員が販売する農産物を組合が買い取り(組合員は組合以外にも販売できる権利が保護されている)、②153組合が買取集荷して販売する農産物をACAが買い取る(組合はACA以外大豆搾油業者、製粉会社、輸出業者にも販売できる)、系統販売事業である。ACAの買取シェアは、①協同組合理念が浸透しており信頼関係が強いこと、②会員としてのモラルへの訴えと販売実績への評価から組合販売量の95%と高い。「生産者⇔組合⇔ACA」の2段階系統販売事業で、ACAの定款上、ショートカットは禁じられている。

第二は、生産資材等の系統購買事業であり、組合とACAが連携して対応している。また、国内2か所に港湾荷役設備を持っており、メッカとなるパラナ川沿いのサンロレンソ(ロサリオの北西20km)での規模、処理能力は地域内No.1で、年間出荷処理量は350万トンとなっている。

#### 4 買取販売の概要

ACAは買取販売なので、価格の変動リスクを抱えることとなる。買取パターンとしては、①(卸価格での)固定買上げ、②先物価格での買い取り、③種等の生産資材の代金としての生産物受取(生産物のうちの何割かを受け取る)がある。③に関して11年の例で言うと、種渡しの時に12年の先物価格で代金生産物の数量が決まる(ACAはCBOT(シカゴ商品取引所)で売りヘッジしてリスク回避する)。

設立当初の1925年からこの仕組みでやっており、競争力ある価格を提示できているとされる。

12百万トンの生産物は、方針として35~40%のみ自力輸出に向け、残りは国内(他の輸出業者、大豆搾油業者等)に仕向ける。穀物メジャーは共存志向で、国内向けの700万トンを狙

っているが、ACAは700万トン全てを売ることはなく、世界的なマーケットの調整役もやり、生産者に対して一番いい単価を提示するとしている。

ACAは準穀物メジャーとも呼ばれており、各社のアルゼンチン全体における買取シェアは、小麦でルイス・ドレフェス=16.5%、ブング=15.8%、ACA=9.5%、ADM=9.2%、カーギル=8.9%(11年)と3位につけている。穀物メジャーの存在は、全く否定できるものではなく、共同作業を行っており、共存が必要で大いに利用したいとしている。

#### 5 巨大で自賄いのBEでの農工連携

ACAは、コルドバ州ビジャマリア市に12年末の試験稼働を目指してバイオ・エタノール(BE)工場建設を進めている。他の4社を含む5大プロジェクトのひとつである。ACAでは、①コルドバ州は港に遠く、トウモロコシのまま輸送するよりも効率化できる、②輸出規制の影響を受けない、③副産物のDDGS(Distiller's Dried Grains with Solubles=穀類蒸留粕)は後背地の酪農地域で活用できるとしている。

この前提には、政府によるガソリンへのBEの10年からの混入義務付けや、ACA自身の農産加工高度化志向がある。混入義務付けは2%(20万kl)から始まり、5%(50万kl)に引き上げられた。その根底には、現在アルゼンチンのガソリンが大きな輸入超過となっている燃料事情がある。

バイオ・ディーゼルでは穀物メジャーに先行され、市場を占拠されてしまったが、BEでの巻き返しが目指されている。

#### 6 おわりに

「中国を食べさせる」のは、少なくとも大豆ではブラジル、アルゼンチンであり、今後トウモロコシにも拡大していこう。

そうしたなかで、日本に比べて経営規模の大きいアルゼンチンにおいて、中規模農家、家族農家を対象に健闘するACAの動向は引き続き注目される。

(注)12年6月29日付日本経済新聞ほか。

(ふじの のぶゆき)